trapezoid ~時空を架けて~

莉杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｒａｐｅｚｏｉｄ　～ 時空を架けて～

【Ｎコード】
Ｎ９０８２Ｘ

【作者名】
莉杏

【あらすじ】
いたってふつうの高校２年生「玲南」は、毎日、担任である数学教師「優紀」とお昼ごはんを共にする。
そこには、それぞれ玲南と優紀が抱える問題があった。
周りからは見えない、人間の抱える闇や葛藤。
そして２人は、現実とは隔離された空間へ引きずり込まれてしまう。
そこで出会った仲間とともに、自分の闇を光に変えることができるのか。　リアル×ファンタジー　完全オリジナル作始まる！

あの人との出会い（前書き）

つたない文章ですが、読んでくださったら嬉しいです☆

あの人との出会い

ｔｒａｐｅｚｏｉｄ：　不等辺四角形・またの名を台形という。

あたしたちの住む世界は、狭い。

「ねぇ、レナ。知ってる？」

「何を？」

「俺らの生きてる世界って、ほんとはすっげぇちっちゃいんだよ」

あたし、唐沢玲南（カラサワ レナ）。　関東のちょっと田舎（？）に住んでる高校2年生。

両親と妹、弟とふつーに暮らしてます（笑）

親友の芽衣からは「玲南はＡ型に見えるッ！」って言われてるけど、Ｂ型です（（＋＿＋））

キーンコーンカーンコーン…

やっと４時間目終わった…。　教室は一気にざわめき始める。

机をガタガタ移動させ、「いつめん」で集まって各々お弁当を広げる。

「焼きそばパンゲットーーー！！！」と騒ぐ男子。

いつもと何ら変わらない。

そしてあたしは、席をたった。

両側に並ぶ教室のにぎやかな声を聞きながら、廊下を歩く。

第二校舎の１Ｆすみっこ。第一多目的室があたしの居場所なんだ。

ドアを開けると、、、いた。

身長１５８センチのあたしよりちょっと高い目線。黒くてつやの

ある髪。グレーのシャツに、青いチェックのネクタイ。
「よぉ　レナ。」
右手のお弁当箱の包みを少し持ち上げて、彼は言った。
彼はこの学校の数学教師。と、言うとそこらのケータイ小説のようだが、あたしはこの人に恋愛感情を注ぐ気はさらさらない。　だいいち、若干２５歳の彼には、寄ってくる女子が山ほどいるわけで、彼は恋人候補に苦労しないってわけである。
「今日は、晴れたな。」　机でお弁当をひろげる先生。
「うん、そうだね。　…昨日の雨、すごかったもんね。」　向かいに座るあたし。
「レナ、チャリでコケなかったぁ？」　卵焼きをかじる先生。
「コケないよっ！　芽衣じゃあるまいし！」　反論するあたし。
「あぁ、早瀬は派手にやってたな～」　お茶のペットボトルに手を伸ばす。首から下げたネームホルダーが揺れた。　…高搭優紀（タカトウ ユウキ）
今のあたしの担任。

「…食べる？」　先生がからあげを目線の高さまで上げる。
「…ううん、いい。」　いつもと同じやりとり。　何ら変わらない。

これが、あたしの教室でお昼を食べない理由。
食べない、んじゃなくて、食べられない。

「そっか。　…美味いのになぁ～。」　からあげをほおばる先生。
あたしは、窓の外に目をやる。　テニスコートの奥の林が、色づき始めていた。
彼と昼を一緒に過ごすようになって、早いもので1年半が過ぎようとしている。

先生との出会いは、あたしが高１の頃。
お昼休み、クラスに居場所がないあたしは、毎日４時間目が終わると校舎の影にある中庭のコンクリートに座って、アイポッドで音楽を聴いていた。
めったに人は通らない。　だからアイポッドを使っていても気付かれる心配がないのだ。
ただ、寂しいだけ。
お昼休みが終わるころ、芽衣が迎えにくる。

あの日も、いつものように音楽を聴いてたんだ。

「…っッ！？」
突然、誰かにヘッドホンを取られ、振り返った。
「あ～　いけないんだ～」　そこに、彼がいた。
「あ、あの、、、」　校則違反がバレたと思い、とっさに手を伸ばすも、後の祭り。
「１年４組　唐沢玲南さん？こんなとこで何たそがれてるのかなぁ？」
不敵な笑みを浮かべる先生。
「なんで、あたしの名前…？」
「唐沢さん、うちのクラスの矢島の友達でしょ。　何度か見かけてたし。」
あぁ、そうだった。　同じ中学の　矢島実緒（やじま　みお）は家の方向も一緒で、２人で帰ることもしばしばだ。　でも、先生はあたしのことなんて知らないと思ってた。

「お弁当は？　昨日も食べてないみたいだったけど。」
「昨日も？」

「あ、昨日っていうか、先週くらいからずっと？」
「見てたってこと？」
「いや、だって俺の弁当食べるとこから丸見えですから。」
「はあ、、、。」

知らなかった。

「もしかして、いじめ…とか、、、？」　おずおずと聞いてくる先生。
「違うよ！」
「…ほんとに？」
「うん。ほんとだってば！友達もいるし。」　笑うあたし。
まぁ、そう思われても仕方ないか。

「ま、なんかあったら、相談のるし」アイポッドをよこし、渡り廊下を戻っていこうとする。

「取り上げないの？」
「なんか、さびしそーだったから。」　笑いを残し、ドアの向こうに消えた。

それからちょくちょく、先生は昼休みに会いにくるようになった。

そして、このころからだ。
あたしが夜、おかしな夢を見るようになったのは。

ここはどこ？

眠りにおちる、ちょっと前。あたしは思い出すんだ。
「今日も、世界の一部でいられました。」

「最近ねぇ～、変な夢見るんだよね。」
いつもと同じ第二多目的室にて。　今日の先生の昼食はコンビニのパン。
「へぇ～。毎日？」
パンを開けながら先生は聞く。
「ううん、なんかね、たまーになんだけど。すっごいリアルなの！」

「それってどんな夢？」
…ほら、パンくずこぼしてるよ！
「う～ん…なんだろ、現実そのものって感じ？」
「ふーん。。」

夢ってわからないくらいに、リアルで、鮮明。
そしてなぜかあたしは１４歳ってことになっている。
３年前だから今とそんなに変わらなくて、身長が少し低くなったくらい。
でも、意識がはっきりしてて、自分の意思で動ける。
場所は、、、よくわからない。
なんだか、懐かしくて少し怖いとこ、、、。
「その夢に玲南以外の人って出てくんの？」

…あと6分で休み時間が終わる。

「うん。いっつも同じ子。」

「子？」

「17歳なの。シグマって名前の男の子。」

「シグマ？それ、名前？　玲南、シグマって何か知ってる？」

「え？　知らないよ。　だってその子が言うんだもん。」

先生の目つきが心なしか哀しそうに見えるのはなぜ？

「シグマは、数学記号。　総和を意味するんだ。まだ習ってないよね。」

「さっすが、数学教師！」　あたしは笑って見せる。

「まあね。…さ、授業だ。玲南。」　先生も笑ってみせる。

台形の夢の中

また、夢をみた。

「シグマ、ねぇ！　シグマったら！」

あたしは走る。

夕方のどこかの狭い路地。　息が上がる。

「遅い。ちゃんとついて来ないと道に迷うぞ。」　シグマが言う。

身長は１７０センチくらい？

黒い髪に、少女を思わせるくらい長いまつげ。

グレーのプリントＴシャツにジーンズ、スニーカー。

特別美少年というわけではないが、なかなか可愛らしい顔立ちをしている少年、シグマ。

「だって…どこ、行くの？」

息も切れ切れのあたし。　なぁんで、夢のなかでこんな疲れてんの、、、？

「俺たちの仲間がいる場所だ。」

「仲間。　時の迷い人ってことかな。」　ふっ、と笑みを見せた。

…この横顔を、玲南はなんだか懐かしく思った。

「！　お姉ちゃん！　いい加減起きてよっ！」

バサッと何かが落ちてきた。

大量のぬいぐるみと枕。
しかめっつらであたしを見下ろしているのは、妹の春南(はるな)だ。
「もう！　お母さん仕事に行っちゃったよ！　あたしも朝練あるから！」
春南は中学1年生。
吹奏楽部に入ったとやらで忙しいらしい。
「もうちょっと寝かせてくれたっていいじゃん泣」
「だーめ！　朝ごはんは食パンだって。あっ！　もう行かなきゃぁ～！」
「いってら～」
いつもの朝。
あっ！　あたしも時間やばっ！
昨夜の夢が、もやもやと頭をかすめた。

その日、急に職員会議があるとかで、あたしは久しぶりに昼休みを中庭で過ごした。
芽衣はいっしょにいようって言ってくれたけど、あたしはそれを断って、中庭にいた。
でもそれはすぐに間違いだったと気付いた。
中庭は校舎の間の風が吹きさらしていて、とてもじゃないけど25分間も耐えられなかった。

教室に戻ると、芽衣たちはトイレに行ったのか、教室は思ったより人がいない。
ただ、いつも実緒たちのグループにいる葵という女子がいた。
あたしは、この子が苦手。
小柄で色が白く、おとなしい。
でもいつもグループから外されることがない。　男子にも人気が

あるようだ。
あたしとは大違いで、とにかく、うらやましかった。

放課後、あたしは図書室にいた。
プレハブ校舎のせいで、やけに湿気がすごい。
でも、暇をつぶすにはもってこいだ。
あたしは、帰りのスクールバスを待つ間にたびたびここに通っていた。
時計が４時３０分を指した。
荷物を取りに、２階のいちばん奥、２年９組に向かう。

夕日が差し込む教室。
ドアを開けようとして、ハッとして手を止めた。
教室には人がいた。
窓に重心をかけて寄りかかり、外をぼんやり見つめる人影。

・・・先生だ。

微動だにしない。
あたしは、動けなかった。
外を見つめる先生の目が、あまりにも哀しげだったから。

結局、あたしはまた図書室に逆戻りするほかなかった。

その夜、また夢を見た。

路地裏の小さな建物。　中はカーテンのような布が何枚も下がって、壁のようになっている。

シグマがそのうちの1枚を持ち上げ、中に入った。
あたしも後につづく。

なかには、6畳ほどのスペース。
そして、床に座ったまま玲南を見つめる4人の姿があった。

夢じゃなかったっけ？

玲南は、ふと、我に返った。
「…これ、夢だよね？」
わけがわからない。　こんな精巧な夢、見たことない。

「違うよ。」　シグマが言う。
「だって、、、えぇ！？」　シグマとほかの４人もこういう人の姿は見飽きているらしい。
「玲南、よく聞いて。」
シグマがこっちをまっすぐに見る。
透き通った茶色の瞳。
「ってか、そもそもなんであたしの名前っ…」
「落ち着いて。　おれたちはみんな同じだ。」
「？？？」
「閉じ込められてるんだ。」

シグマは真剣だった。

「夢だよ！　すぐに覚めるし！」　反論するあたし。

「無理だよ。　俺たちはここから出るためにいろいろ試した。何回も何回も。　でも、すべてダメなんだ。ここは、現実とは違う。」
シグマが言う。

「嫌！　やだやだやだ！　ここはバーチャルってこと？　そんなのありえない！」

「ありえるんだよ！　現に、俺だって信じられないんだ！　まさか、夢にとりこまれるなんて、、、。」
シグマは口を閉ざした。
そこではじめて、あたしは周りを見回した。
ちゃぶ台のようなテーブルを囲むように座っている４人。
ぱっと見た感じは、ふつうの人みたい。
あ、でも左から２番目の女の子は見たことあるような…？
「とりあえず、自己紹介だ。」　シグマは冷静だ。
「誰からやる？」　シグマの隣の少年が尋ねる。
「やっぱシグマからでしょ。」　見たことある少女が笑って言う。
「仕方ない…。　俺はシグマ。１７歳…ってことになってる。よろしく。」
無愛想ながらの自己紹介。
「私はミル。　１５歳。好きな食べ物はチョコレート！　よろしくねっ！」
ガーリーな感じの格好で、栗色の巻き髪がかわいい。
「…コトリ。」
１番小さい女の子。　少女にそっくりの人形を抱えている。
「ほらコト。　もっとしゃべれ。　いくつ？」
隣の少年がコトリの頭を撫でる。

「…　…。　４さい。　このこ、あかり。」
人形をの服をいじりながらそれだけ言った。
「はーい！　次は俺！　アイト、１７歳。好きなスポーツはバスケ！よろしくなっ☆」
人なつっこい明るい笑顔。　いかにもクラスの人気者って感じだ。
「はい！次は君の番だよ！」
アイトがあたしの肩をたたく。
「、、、唐沢　玲南です。１６歳です。　よくここは夢で見てて…。あの、まだよくわかんないけど、よろしくお願いします、、、。」
ぱちぱちと小さい拍手が起きる。
「玲南。今の自己紹介でわかったと思うけど、ここでは名字とか、本名は使えない。禁止されてるんだ。」シグマが言う。
「今から、玲南に名前をつける。」
「どうやって…？」
「ミル。　玲南に名前をつけられる？」
驚くミル。
「わ、私、、、？」
「そうだ。　女同士だし、玲南もそのほうがいいだろう。」

「わかった。　ええと、、、。」
ミルはあたしをじぃっと見つめた。
あたしも、ミルを見つめた。　やっぱりどっかで見たことあるんだよね…。

「決めた！」
ミルが言う。

「ララ。　同じＲの音が入ってるし、ほらそのストラップ、、、！」
あたしは、そのとき初めて自分の格好を見た。
紺のパフスリーブのトップス。細かいドットが散っているキュロットにトレンカ。
日本の一般の女子高生が好むスタイル。

そしてなぜかキュロットのベルト部分に、「あの」ストラップがついていた。

２週間前、先生がくれたストラップ。。。
小型のクレーンゲームでたくさん落ちてくるようなものだが、あたしは嬉しかったんだ。
ゴム製の樹脂で作られたカップケーキのフェイク。
先生は言った。

「玲南が昼飯をちゃんと食べられますように。」

フェイクの側面には「ｌａｌａ　ｓｗｅｅｔ」とロゴが入っていた。

「どう？　ララ。」

ミルが不安そうに聞く。

「いいじゃんララ！　可愛いよ！」
アイトがはしゃぐ。

「どうだ？」　とシグマ。

「うん！　嬉しい！　ありがとう。ミル。このストラップ、大事な人からもらったものなの。」

…一瞬、シグマが驚きの目でこっちを見た気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9082x/

---

trapezoid ~時空を架けて~

2011年10月28日02時10分発行